

と全く同じ火山灰層が分布する。

一方、南部ではM1面と同様に火砕流堆積物は分布せず、阿蘇4火砕流に伴う降下火山灰層が分布する。それゆえM2面までの段丘面は、七・五万年前以前に形成されたと考えることができる。

(3) 低位段丘面

低位段丘面は行橋平野で最低位の段丘面で、主に扇状地の形態をとる。しかし、豊津町では祓川に沿って、中位段丘面を浸食した段丘面としてみられるのみである。行橋市域に入ると、祓川左岸の福原を中心とする扇状地が顕著で、先端部は沖積面下に埋没し、その連続は沖積面下に追跡できる。

堆積物は福原では最大径二〇センチ、平均径五センチの扇状地礫層である。この段丘面には阿蘇4火砕流に関係する火山灰層はみられないので、七・五万年前以降に形成された面をすべて含んでいると思われる。

三 低 地

低地は今川流域の低地と祓川流域の低地があり、その両者は異なった性格を持っている。今川流域の低地は、いわゆる谷底平野としての性格を持っているが、祓川流域の低地は扇状地としての性格を持っている。すなわち、豊津町の北縁部での今川流域の低地は一二〜二三メートルの海拔高度で、祓川流域の高度は一八〜二〇メートルであり、南縁部付近では、今川流域で二〇〜二五メートル、祓川流域では七五〜八五メートルで、明らかに祓川のほうが急勾配で流下している。

今川流域の低地は、犀川町本庄では盆地的な状態を示し、豊津町高崎—彦徳付近の最後の峡谷部を通過して行橋平野の低地部へ入るが、峡谷部より下流の行橋市天生田、流末付近では低地の河道跡から、旧今川が大きく蛇行して流れる様子が分かる。これは三角州上を流れる河道の特徴を示す。

一方、峡谷より上流側の低地は犀川の盆地部を形成するが、犀川町花熊の集落は馬ヶ岳山地からの扇状地上に立地し、続命院、古川などの集落は一段高い低地面に位置する。それらの集落から今川現河道までの地域では、河道変遷が著しく、それも基本的には山側から現河道側へ徐々に移動しているようにみえる。この河道変遷が著しい地域は、いわゆる氾濫原に相当する地形で、陸化は最も遅い時期であったと考えられる。

祓川流域の低地は、犀川町犬丸—豊津町節丸間の最後の狭窄部きょうさくから谷幅が広がり、活発な河道変遷を行うようになる。綾野—徳政より下流は、祓川の現成の扇状地で、扇状地上を流れる網状流としての河道跡が顕著である。しかし、国作付近には明瞭な河道跡がみられない。

惣社から竹並に至る河道跡は、豊津原の開析谷の連続であり、祓川の旧流路は不明瞭である。このことは、この地点がかなり古い時代から祓川の氾濫の影響が及ばない高燥な地域をなしていたことを示している。豊前国府は国作の、この微高地上に位置しており、洪水に対しては比較的安全な場所に置かれていたと考えられる。